

國學院大學學術情報リポジトリ

国際研究フォーラム「21世紀における国学研究の新展開 国際的・学際的な研究発信の可能性を探る New 21st Century Developments in Kokugaku Studies : Exploring the Possibilities for Disseminating International and Interdisciplinary Research」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000567

国際研究フォーラム「21世紀における国学研究の新展開 国際的・学際的な研究発信の可能性を探る New 21st Century Developments in Kokugaku Studies: Exploring the Possibilities for Disseminating International and Interdisciplinary Research」

2020年2月8日、日本文化研究所の主催により、国際研究フォーラム「21世紀における国学研究の新展開 国際的・学際的な研究発信の可能性を探る」が開催された。

21世紀に入り、一次資料に即した国学の実証研究が個別に進展する中で、近世～昭和期にかけての国学をめぐる学術的な意義づけを総合的に再検討する必要が出てきている。本フォーラムでは国学研究の国際的な相互交流をテーマとし、国内の研究者が見落としている視点はないか、海外へ発信すべき成果とは何かを模索するために、実証的な国学・国学者研究を推進している5人の外国人研究者を招いた。それにより、国学を起点とした広範な研究ジャンルへの展開を探究し、日本文化研究ならびに欧米・アジア文化との比較研究のツールとして「国学」を捉えなおすとともに、グローバルな国学研究ネットワークを築く端緒となることが目指されている。

なお、開催言語は日本語であり、全体の司会は遠藤潤氏が務めた。

基調報告 松本久史（國學院大學）

研究開発推進機構の松本氏は、「本フォーラムの主催者の問題意識と学術的背景」と題する基調報告を行った。松本氏は「国学研究プラットフォーム」事業を紹介したのち、國學院大學における「国学」研究が、国際的な比較を行う日本文化研究として展開してきたことを述べた。一方、日本社会における一般的な国学認識としては、昭和初期に顕著な、ネーションステートに向かうベクトルの影響

が未だ強い。ある特定の時代の国学理解によって近世以降の国学全体を理解しようとする傾向があり、近世国学自体を問う視点があり見られなかったのだという。

しかし、21世紀に入ると平田国学や荷田派国学の史料調査が進展し、皇国中心主義に限定されない近世平田学、先行学説の祖述に留まらない春満の業績といった形で、近世国学全体の再検討が要請されてきたと松本氏は指摘する。そして、「タコつぼ化」を乗り越えて共通の通史的「国学」理解を醸成すること、他文化を背景に持つ外国人の目から近世国学を捉え直し、多（他）文化との共通した課題を設定することを課題として提示した。

報告① ジョン・R・ベンテリー（アメリカ・北イリノイ大学）

ベンテリー氏は、「国学における言語学の意義」と題して報告を行った。アメリカでの国学研究は知的歴史・文学・思想などを中心とするが、ベンテリー氏の場合は文献批判と言語学を研究の視座にしているという。

具体的には、賀茂真淵による動詞の活用の分類、本居宣長による漢字三音の分析、鹿持雅澄による開拓的な日本語の形態論といった、国学者の築いた国語学の土台が、言語学的視点から取り上げられた。現代の日本語学は国学の言説を誤謬とし、そこに立ち返って論を立てることはなされないが、ベンテリー氏は、現代の感覚から見る傾向を減らせば、前・中期の国学による言語研究が国語学に与えた影響の重要性が認められると主張する。

2013年にベンテリー氏が英訳版を出版した『玉勝間』の項目を分類すると、約四分の一が言語学で占められていることが分かる。宣長は言葉の意味・ニュアンス・使い方に敏感であった。国学の知的宝庫に言語学を加えることで、その研究を拡大・活性化し、海外でも発展させる可能性が見出せるのである。

報告② 裴寛紋 (韓国・KAIST)

次に裴氏は、「国学、実学、朝鮮学——学術運動としての韓国「国学」研究の動向と展望」と題する報告を行った。1930年代の植民地朝鮮では、18世紀ごろの漢文脈的な「実学派」の思想、特に丁若鏞の思想に光を当てる「朝鮮学運動」としての「国学」が存在した。朝鮮学は民族独立運動と深く関わり、「実学」における自主的近代化の可能性が実現していれば植民地にはならなかったという期待が含まれていた。そのため、朝鮮学研究は1990年代まで独立運動史の観点から進められてきたが、2000年代前後から、1910年以前の「国学」との連続性、同時代の日本・中国の「国学」をも視野に入れた、学術史的な接近へと中心が変わってきた。それによって、「国学」の普遍的性格や現代的意義が浮き彫りにされてきたと裴氏は述べている。

18世紀の「実学」は、実質的なネットワークとしては強くない「学风」のようなものだったが、1960年以後の「国学」研究は、「実学」を「学問」として実体化して論じてきた。21世紀、そのような「近代志向」の実学研究は反省され「近代省察」の「新実学」が提案されている。裴氏は、中国や韓国において「国学」が復活している現象を挙げ、「国家のために」という呪縛から解放されたいと結んだ。

報告③ 蔣建偉 (中国・中山大学)

蔣氏は、「会沢正志斎における「天祖」の位置」という題目で報告を行った。江戸後期水戸藩の思想家だった会沢は、その国家構想

である「国体」論の諸要素を「天祖」即ち天照大神と結びつけ、「天祖」を世界観の核心に据えている。

神道において「天祖」を天照大神とする立場は自明ではなく、後期水戸学に限っても揺れが見られるなか、会沢は、「天祖」を天照大神のみの呼称とし、「天神」と区別した。会沢の意識は、『迪彝篇』や『下学邇言』における『神皇正統記』・『延喜式』の編集・操作に表れている。民衆の心を専一にする機会として大嘗祭などの祭祀を捉え、天照大神＝天祖を群神から隔絶した存在として強調しており、一なるものへ民衆の心を帰する意識があったかのように見える。

蔣氏によれば、会沢における「天祖」観の背景には歴史と現状への認識があった。天祖＝天照大神を崇敬する人心が散乱するとき、時代は治から乱へと傾いていく。会沢は、同時代の仏教から民心が離れ、キリスト教が介入することを恐れていた。神道や儒教は、現状では人心の離散を挽回できない。それでも会沢は、天祖への信仰と人倫が人心に残存していることを確信し、人々に語りかけることで秩序の回復を目指したのであった。

報告④ ベティーナ・グラムリヒ＝オカ (上智大学)

オカ氏は、「只野真葛 (1763-1825) と学術ネットワークの欠如について」という題で報告を行った。英語圏の研究では、徳川時代の人的ネットワークという概念が注目されてきたが、男性のみが取り上げられる傾向があり、女性の関わり方が無視されているという。ここでオカ氏は、国学者、儒学者や蘭学者の学術ネットワークにおける女性の関与・役割を問うために、徳川時代に生きた一人の女性・只野真葛を取り上げる。

仙台藩医・工藤平助の娘として生まれた真葛は、父の死後、『むかしばなし』を執筆した。そこからは、真葛周辺のネットワークが性別

化されていたこと、性別が理由で有益なネットワークへと手が届かないことへの自覚を伺うことができる。

真葛は、新たなネットワークに加わるために、「ひとりかんがへ」を執筆し、面識のない曲亭（滝沢）馬琴に送って編集と出版を依頼する。馬琴は「真葛のおうな」『独考論』を記して真葛を批評する中で、「男のように考える」女であると感銘しつつ、学問的な知識や素養が足りないことを非難した。

儒教を批判したために国学の学派だと考えられることのある真葛だが、儒学や蘭学をも折衷しており、どのようなカテゴリーにもぴったりとは当てはまらない。一つの理由は真葛のジェンダーであり、男性中心で排他的な学問の世界にコネクションを作り、思想家となった点はユニークである。ただ、最終的には初志を成し遂げることができなかった。

報告⑤ 藤原義天恩（カナダ・レスブリッジ大学）

藤原氏の報告は「欧米における国学研究の過去から未来へ——研究史と津軽国学の紹介」と題するものだったが、事情により参加できなくなったため、司会が代読した。

まず藤原氏は、ハリー・ハルトゥーニアン、アン・ウォルソール、マーク・マクナリーら三氏の業績を欧米の国学研究史として紹介したのち、「国学」を英語でいかに表記すべきかという問題を論じた。

これまでの英語による研究では、近世から近代への連続性を重視する“National Learning”や、他文化の脅威に対する自らの文化の復興という意味合いを持つ“Nativism”、そしてローマ字化した“*Kokugaku*”が用いられてきた。しかし、米国史研究に由来する“Nativism”については、国学の一側面である、尊皇攘夷思想に限られるといったように批判も多く、最近では皇国日本の特殊性と優越性を主張する思想として

国学・水戸学を含む“Exceptionalism”、それを不適切とする論者からは“Japan Studies”といった訳語も提案されている。とはいえベンテリー氏のように、ローマ字の“*Kokugaku*”を適切とする場合がやはりある。

藤原氏自身は津軽の平田派国学を研究しており、弘前で最初の篤胤没後門人である平尾魯僊が、平田学派の人脈ネットワークを情報源の一つとして、最新の政治・社会情報を「風説留」にまとめたことなどを紹介した。

コメント・総合討議

以上の報告を受けて、近世の陰陽道と近代の仏教を専門とする林淳氏（愛知学院大学）・日本文学・国文学を専門とする一戸渉氏（慶應義塾大学）・吉田松陰を中心に思想史を研究している桐原健真氏（金城学院大学）によるコメントが行われた。

林氏は、近世と近代の連続性や、ナショナリズムの捉え方について述べたのち、各報告の内容に関して具体的な質問を行った。

一戸氏は、国学あるいは「和学」の多様性・雑多さに関して注意を促した上で、国学の特徴である「復古」をとっても武家・公家など様々な階層による差異があり、時期によって多様で捉えがたい、ローマ字で“*kokugaku*”というしかないような日本の国学をどう近世の研究に活かすかが課題とした。

桐原氏は、「個別具体的と普遍抽象的」「目的的和手段的」という軸に基づく四つの象限で国学研究を分類した。他に桐原氏は、近世社会における儒学の優位と市井の学問としての国学の位置などを指摘しつつ、近代における国学の叙述や、新国学の可能性に触れた。

報告者によるリプライの後、フロアの参加者とも、活発な質疑が交わされた。登壇者以外にもおよそ100名が参加し、国学研究の今後を期待させる盛会となった。本フォーラムについては報告書も刊行される予定である。

（木村悠之介）